

巨大災害と立ち向かう 3.11 で分かった日本の防災常識を世界に発信しよう

背景・目的

2011年3月11日の東日本大震災後、通常に勉強できる生活を取り戻すために、自分の震災経験を整理し、その中のさまざまな葛藤を克服することが必要となる学生がいると予想された。そのために、日本で「当たり前」に行われている防災の諸相を世界に英語で発信することによって、学生が自分の気持ちを前向きに切り替えられるきっかけを提供すべく、「巨大災害と立ち向かう」プロジェクトを実施した。

実施内容

5月の授業開始時から、参加希望学生を募り、2年生および4年生、合わせて8名の参加を得た。週1回のペースで集まり、指導教員のモリスと一緒に、震災後、自分が直接経験したこと、または観察したことで自分の役あるいは人の役に立ったことを話し合い、文章にまとめた。この作業のポイントは、学生の被災体験を相対化させ、その中には人の役に立ったこともあったことに気付くように導いていくことであった。



亘理町での聞き取り調査参加者

この作業の中で、日本の防災常識が世界的に見てどれだけ進んだものであるかを学生に認識してもらうために、5月27日に国際NGOプラン災害対策統括責任ウニ・クリシュナン医師を招き、今回の災害における日本側の対応から世界が何を学べるかについて、公開講演を実施

した。学内、学外から広く参加者が集まった。

また、大学の学生ボランティアセンターを通して、国際文化学科の学生が中心となり、亘理町からの依頼で町内の生存者に対し聞き取り調査を7月9日から12月3日の間に10回行い、66名の証言を記録し、町に提供した。

最後に、12月17日には、「3.11 私たちもともに震災を乗り越えた 『外国人』 県民の視点から震災後の宮城と日本の多文化共生を問う」とパネルディスカッションを開催し、在留外国人の視点から被災と支援の意味を問うた。

結果及び考察

地震・津波を生き抜くための提言を集約して英訳し、上掲の *Surviving Earthquakes and Tsunami* を A4 用紙 1 枚の資料としてまとめ、インターネットでも公開した。この提言を利用して、学生は、本年度の本学科語学実習（タイ）および海外実習（ヨーロッパ）中に今回の地震・津波について発表した。学生にとっては、発表することが自分の被災経験の意味を人のために役立つものに読み替えていくというプロセスになり、大きな意味があった。



12月17日パネルディスカッション

5月27日の公開講演を通して、このプロジェクトの成果の一部を広く共有することができた。12月17日の催しは、震災と外国人を取り上げた初めてのもので、国内内外から注目された。

<http://www.mgu.ac.jp/~jfmorris/Tsunami/TopPage.htm>